

快樂の鎖に繋がれた巫女

—— 何度も絶頂に墮とされる宿命の乙女

夜果堂書房／高瀬ザクロ

第一話

夜の神殿は松明の炎に照らされ、甘い香りと湿った空気に満ちていた。

石床の上に静かに横たわるのは、白い衣を纏った少女、リリア。

この国では珍しい黒髪と黒い瞳を持つ巫女。

月光を吸い込んだような漆黒の髪は腰まで滑り落ち焰に照らされて艶やかに光を返していた。

透き通るように白い肌との対比がその存在をいつそう際立たせる。

瞼は長い睫毛に縁どられ、閉じられていてもどこか艶めかしく、唇は花びらのように淡く紅を帯びていた。

まだ若さを残しながらも衣の下に隠された身体の曲線は女としての成熟を宿し、男たちの目を釘付けにする。

リリア——聖なる巫女。

彼女は偶然選ばれたのではない。

代々この国に仕える「黒き巫女」の血統に生まれた娘であり、聖なる儀式を背負う宿命を与えられた存在だった。

黒髪と黒い瞳は、その家系の証であり、同時に神々が選んだ特別な印でもあった。

彼女の身体は性交によって相手に「恩寵（ギフト）」を与える。ただ一つの定め。イけばイクほど、その力は高まる。

絶頂のたび、肉体からあふれる熱は光へと変わり、相手の血肉に宿って強さとなる。

それは神が与えた祝福であると同時に、女としての羞恥を強いる残酷な宿命だった。

ゆえに男たちは巫女をひたすら責め立て、何度も絶頂させる。

それこそが、この国で代々受け継がれてきた「聖なる儀式」と呼ばれるものだった。

今宵の相手は、まだ年若い兵士だった。

甲冑を脱ぎ捨てたその肩は細く、しかし眼差しは燃えている。

「巫女様……どうか、私に力を……！」

熱に浮かされたような声で祈るその姿にリリアは瞼を伏せ、白布を静かに脱いだ。

——これは使命。心を切り離せば、ただの仕事。

そう自分に言い聞かせる。

生まれつき“淫らに造られた”巫女の身体は、男の手が触れるだけで敏感に反応してしまう。

「……巫女様……」

兵士の荒い息が耳にかかり、柔肉を乱暴に鷲掴みにした。

「ひあっ……あっ……！」

ぐにぐにと揉みしだかれ、突起を指先でねじられるたび、リリアの身体は小刻みに跳ねる。

熱に濡れた舌が乳首をじゅるじゅると吸い上げる。

「やあっ……んんっ……いやっ……!」

否定の声とは裏腹に突起は硬く尖り、ちゅぱちゅぱと吸われるたびに腰が揺れてしまう。

下腹部では無骨な指が花卉をぐちゅぐちゅとこじ開けていく。

愛液でとろけた蜜壺は容易く指を受け入れ、敏感な蕾は容赦なく擦り上げられる。

「ひぐっ……あっ……だ、だめっ……そこは……!」

クリトリスを直に弾かれるたび、全身がびくんと震え、腰が勝手に跳ね上がる。

必死に閉じようとした脚も兵士の膝で押し開かれ、逃げ場はない。

「巫女様……すごい……もう、こんなに熱い……」

兵士の息は荒く、腰が震えていた。

その昂ぶりを押し殺すことなく彼は怒張を握り、濡れそぼる入口へ一気に突き立てた。

「いやっ……だめ……っ！」

ぐちゅり、と肉を押し分ける音とともに、奥を容赦なく抉られる。腰を突き上げられるたび粘膜が擦りあがり、全身を貫くような衝撃が走った。

「ひぁあっ！ あっ……だめええ……！」

快樂の波が絶え間なく押し寄せリリアの理性を削ぎ落としていく。頭では必死に否定しても、脳髓へ突き抜ける電流のような甘さに、

身体は簡単に裏切ってしまう。

「くうっ……巫女様……すごい……締めつけが……！」

若い兵士は必死に腰を打ちつけ汗を飛ばしながら突き上げ続けた。
リアは涙を浮かべ、首を振りながらも背を反らす。

「やあっ……ああっ、だめ……だめえっ……イク、イクううっ！
いやあああっ！」

肉棒に子宮を挟まれ乳首を強く吸い上げられ、さらにクリトリスを
擦り潰され――

三重の快楽に追い詰められたリアの身体は限界を超え、全身を
大きく仰け反らせた。

「ひああっ……イクイクイクッ……イクうっ！」

その絶叫と同時に、彼女の白い肌の奥からまばゆい光が溢れ出す。

下腹部を中心に脈打つように輝きが広がり血管を通じて四肢の先まで駆け巡る。

指先が震え胸の谷間が淡く輝き、涙に濡れた頬までもが金色に照らされていった。

光はやがて一筋の奔流となり、リリアと結合した男の体内へと流れ込む。

肉体がそれを受け止めた瞬間、兵士の筋肉がぶるりと震え、血管が浮き上がる。

皮膚の下を走る力の奔流が筋繊維を膨張させ、肩や胸板は瞬く間に分厚く隆起していく。

「ぐっ……すごい……！　力が……溢れるっ……！」

呻く声とともに、彼の瞳がぎらりと光を帯びた。

ただの肉体的な快感ではない——リリアの絶頂が放つ「恩寵」が、その身に宿り込んだ証だった。

だが彼は止まらない。

「もっと……もっとだ！」

必死に腰を打ち込みリリアを二度、三度と絶頂に追い込んでいく。

腰を突き上げられるたび張り詰めた快感が弾け、何度も何度も絶頂へと引きずり込まれる。

「いやっ……もう無理……！　ああああっ！」

何度も痙攣し、蜜を溢れさせながら、リリアは涙を流した。

イけばイクほど、巫女の身体から溢れる光は男の中へと流れ込み、血潮を熱くたぎらせる。

筋肉は強張り、腕に力が宿り、視界は鋭さを増す。

凡庸な兵士であつても一度の交わりで戦場を駆け抜けられるほどの力を得る。

それが“聖なる巫女”の宿命だった。

若い兵士は満ち足りた表情を浮かべ、退出の間際に吐き捨てるように笑った。

「やはり噂通りだ……巫女様は神の娼婦だな」

リリアは石床に膝を抱え、震えながら嗚咽を漏らした。

第二話

夜の儀式が嘘のように、街の市場は早くから賑わいに満ちていた。

野菜を並べる商人の声、値切る客の甲高い声、子供たちの笑い声

——それらが幾重にも重なり合い、陽射しとともにざわめきを作り出している。

リリアは人目を避けるように、深くフードをかぶり、石畳を静かに歩いていた。

腰や脚に残る鈍い痛みが、一晩中繰り返された儀式を思い出させ、足取りは自然と重くなる。

すれ違う女たちの囁きが、鋭く耳に突き刺さった。

「巫女様って、結局は男に抱かれるだけでしょ」

「羨ましいわよね、楽な仕事で……あれで食べていけるんだから」

「私なら一晩くらい喜んで代わってあげるのに」

乾いた笑いととも吐き捨てられる言葉。

どれも無邪気に交わされる雑談にすぎないのかもしれない。

だがリリアには、それが鋭い刃のように胸を抉った。

唇を強く噛みしめ、視線を落とす。

誇り高く神に選ばれし者であるはずの役目は、民にとっては何の

「娼婦まがい」にしか映らない。

白布に包まれた身は神聖であるはずなのに、その清さは侮蔑と嘲りに汚されていた。

そのとき、不意に影が差した。

「もしや、花をお探しですか？」

見上げた先に立つ青年。

日差しを浴びたその姿は、絵画から抜け出した騎士のようだった。鍛え上げられた体軀は無駄がなく、広い肩から引き締まった腰にかけて流れるような線を描いている。

身に纏う赤い軍装は威厳に満ち、胸元の金糸の装飾や肩章が彼の若さと同時に確かな位を示していた。

風に揺れる短めの金髪は陽光を受けてきらめき、額には汗がひと筋伝っていた。

その下に覗くのは、湖のように澄んだ青い瞳。

冷たさではなく、まっすぐな意志と誇りを宿した光が宿り、真正面からリリアを射抜いていた。

若き騎士——ユリウス。

人々の中にあってもひとときわ目を引く存在感をまとい、まるで「守護」の象徴そのもののように立っていた。

彼は微笑み、手にした花束を差し出した。

「この市場の任務帰りに渡されてしまって……ありがたいのですが僕には似合わないでしょう？よろしければ、どうぞ……」

思いがけず受け取った花の温もりに、リリアの胸は強く脈打った。誰からも蔑まれ娼婦のように扱われる自分に、彼だけはただ一人の

女として微笑みかけてくれた。

頬に熱が差し、唇が震える。

必死に無表情を装おうとしたが、かすかに笑みが零れてしまった。

「……ありがとう」

その小さな笑顔が、リリアの中にかすかな光を灯した。

第三話

だが夜が訪れれば、宿命は容赦なく彼女を縛った。

その日の儀式に選ばれたのは、裕福な商家の息子。

金糸の刺繍が施された衣服を纏い香油を塗りたくった肌は脂ぎって
艶めいている。

「巫女様と交われるなんて光栄ですよ。……男冥利に尽きる」

舐め回すような視線にリリアは唇を噛みしめて石床に横たわった。

——これは使命。ただの仕事。ただの義務。

そう自分に言い聞かせても、心臓の鼓動は早まっていく。

男は巫女の価値を知っているつもりでいた。

「イかせればイかせるほど力が得られるんだろう？なら……徹底的に楽しませてもらいますねえ」

その言葉どおり、いきなり両胸を驚掴みにし、柔肉を潰す。

「ひあっ……あっ……！！」

突起を荒々しくねじり上げ、舌でぬらついた熱を与えられるたび、リリアの喉から小さな悲鳴が洩れる。

「ん……っ、いや……やめて……ああっ！」

だが拒絶の声とは裏腹に、身体はすぐに熱を帯びていった。

花卉を掻き分ける指が奥をぐちゅぐちゅと抉り、愛液があふれる。

クリトリスをぐりぐりと擦り立てられ、腰が勝手に浮き上がる。